

# 三ノ宮卯之助の伝説

NPO 法人・越谷市郷土研究会 加藤 幸一

## 1. 生い立ち

・三ノ宮卯之助は、今から200年以上前の、江戸時代の文化4年（1807年）の卯の年に生まれました。生まれた場所は、現在の越谷市三ノ宮です。当時の岩槻藩領三ノ宮です。地元では、三ノ宮卯之助に関する言い伝えが戦後まで残っていました。

・卯之助は、生まれつき体の弱い虚弱体質で、背の低い小柄な子供でした。そのために、友だちと相撲をとっても、力石持ち比べをしても、いつもビリで、最下位でした。そして、みんなから「力なし」「弱虫」とからかわれていました。

・そこで、卯之助はあまりのくやしきから、夜などに、人目の付かないところで、こっそりと練習に励み、特訓して、体を鍛えました。やがて、卯之助は、相撲や力石では、村一番の力持ちに成長しました。

・そんな或る日のこと、近くの元荒川で、上流から米俵を積んできた小舟が浅瀬に乗り上げて動かなくなっていました。船頭や村人たちが川に入って小舟を引いても押しても、少しも動きませんでした。みんな困っていました。それを土手の上から見ていた卯之助は、川岸に降りてきて、川に飛び込みました。そして、小舟と川底の間の僅かなすき間を見つけて、小舟の下へ潜り込みました。さらに、仰向けになり、両手・両脚を使って舟底を僅かに押し上げ、小舟を川瀬から深みのある方へと何度も何度も少しずつ押し進めました。やがて、小舟は浅瀬を離れ、目的地の瓦曾根の河岸場まで行くことができたのです。

・今では、三ノ宮卯之助のこのような言い伝えは残念ながら忘れられています。

※この言い伝えは、大袋村の村長の瀬尾哲太郎氏から高崎<sup>つとむ</sup>力氏が直接聞いたものをまとめたものです。

## 2. 活躍

・越谷の瓦曾根溜井には、江戸時代、元荒川の瓦曾根溜井堰と中土手があり、中土手には瓦曾根河岸場がありました。瓦曾根河岸は、元荒川の上流と下流の船荷の積み替え作業が行われ、人や物資の交流の盛んな場所で、江戸舟運の重要な河岸場の一つでありました。この河岸場で働く舟荷人足たちの間で、荷物や力石を使っての力比べが行われていたと思われます。その中に瓦曾根河岸の上流、三ノ宮村からやってきた三ノ宮卯之助もいたと思われ、ここでも力をめきめきとつけていったと考えられます。

・瓦曾根の観音堂（かつての最勝院）境内には、卯ノ助が持ち上げた力石がありました（現在は行方不明）。その力石は、当時の力比べの名残と思われ、その影響からか、観音堂では古くから相撲大会が開催されてきています。以前は現役の力士も招待されて参加していました。

・卯ノ助は、いつの頃からか、江戸を代表する力持ちとなり、力持ちの一座を結成し、江戸の見せ物興行で名声を博し、さらに興行の旅巡りに出ました。先々の神社や寺院には、卯ノ助の名を刻んだ力石が奉納されました。足取りは、関東周辺から兵庫県姫路にまで及んでいます。

・文政8年（1825年）卯之助18歳の時、岩槻藩領の飛び地、太田袋（現在の久喜市太田袋）の琴平神社で、卯之助の師匠となる長宮村（現在の春日部市長宮）出身の肥田文八や地元力士3名も加わって、50貫目（およそ200キログラム）の力石を奉納するために持ちあげています。その頃は、卯之助が三ノ宮橋のそばに住んでいたのも、「三ノ宮橋の卯之助」という意味から、三橋卯之助（「さんのは

し・うのすけ」と読むのであろうか)と呼ばれていたようです。

### 3. 年表

- 文政12年(1829年) 瓦曾根の観音堂に卯ノ助22歳の時の力石がある。
- 文政12年(1829年) 岩槻領の飯塚神社に卯ノ助22歳の時の力石がある。
- 文政13年(1830年) 岩槻領の鈎上神明社に卯ノ助23歳の時の力石がある。  
瓦曾根の観音堂と同じく、古くから相撲大会が盛んに行われていた。  
今でも古式土俵入りが行なわれ、国の重要無形民俗文化財に指定されている。
- 天保2年(1831年) 越ヶ谷の久伊豆神社に卯ノ助24歳の時の力石がある。  
越ヶ谷町の本町の会田権四郎によって取り仕切られた「勸進奉納力持興行」が行われ、越ヶ谷の久伊豆神社に金銭的に多大な貢献をしたと思われる。  
現在の越ヶ谷の久伊豆神社の秋祭りの最初の行事では、台座に乗っている卯ノ助の力石、及びすぐ背後の榊に向かって神官が祝詞をあげて、神の降臨を仰ぐ。これは、天保2年の卯ノ助の力石興行に感謝しての名残と考えられる。
- 天保4年(1833年) 卯ノ助26歳の時、卯ノ助一座は、江戸深川八幡宮境内において徳川家の第11代将軍家斉の前で御上覧力持ちの栄を受ける。  
力持ち興行を将軍がご覧になったのは、このほかに例はない名誉なことであった。
- 天保7年(1836年) 卯ノ助29歳の時、江戸力持ち番付で関脇に位置する。
- 天保9年(1838年) 信州諏訪大社下社秋宮に卯之助31歳の時の力石がある。
- 天保11年(1840年) 大坂の天満宮に卯之助34歳の時の力石「大盤石」がある。  
大阪天満宮の力石は未計測だが、桶川にある、日本一の力石「大盤石」に匹敵する程の重さかもしれない。
- 嘉永元年(1848年) 三野宮香取神社に卯之助41歳の時の力石、「大盤石」、「三王石」、「さし石」がある。  
この年江戸力持ち番付で東の大関となる。
- 嘉永2年(1849年) 三野宮の香取神社に卯之助42歳の時の力石「白龍石」がある。  
甲府市太田町の稲積神社に卯之助42歳の時の百廿貫の力石がある。
- 嘉永5年(1852年) 桶川市寿の稲荷神社に卯ノ助晩年の45歳の時の力石「大盤石」(足指し)がある。これは、日本最重量の力石(610キログラム)となっている。  
桶川町の豪商など11名の名前が刻まれているので、盛大な力持ち興行が行われたと思われる。
- 嘉永7年(1854年) 卯之助(48歳)死亡。死亡地、埋葬地とも不明。

### 4. 最期

これも地元でささやかれてきた言い伝えです。

江戸にいる関西の大名が、大坂方の力持ち1位の力士と、江戸方の力持ちの1位の力士を対決させて、

日本一の力持ちを決めようとなりました。大坂方1位の者と、江戸方1位の三ノ宮卯之助を江戸の大名屋敷に呼び寄せて試合をさせました。その結果、江戸方の卯之助が勝ちました。こうして、日本一決定戦は、江戸方の力持ちが勝利して、三ノ宮卯之助は、事実上の日本一に決まりました。その夜、決定戦が行われた大名屋敷で、双方の力士を交えて、祝いの酒盛りが催されました。卯之助は、酒盛りを終えての水天宮（東京都中央区）近くにあった卯之助の道場に帰る途中、道端で突然、苦しみ出し、悶え倒れてその場で亡くなりました。このような突然死であったため、死因については、食中毒とも毒殺とも言われています。

現在、三ノ宮卯之助の御子孫のお宅（越谷市三野宮235番地の向佐家<sup>むかき</sup>）には、卯之助のご位牌があり、表側には、「到刹清個士」（とうさつせいこじ）と書かれ、「到刹」の字は、別の字の「倒殺」と置きかえると、「倒れて殺された」と読めるのです。その下には、「嘉永七年七月八日 不二位」と書かれています。裏側には「日本市大力持（にほんいち おおぢからもち） 三ノ宮卯之助 四十八歳」と書かれています。

なお、高崎力氏によると、上記の位牌と卯之助の力持ち興行に使ったビラの版木は、越谷駅の前（現在の東口）に疎開していた下田氏が東京に帰ることになった昭和23年頃に向佐家に渡されたということです。下田氏の先祖は、卯之助のマネージャーだったと思われます。それゆえ、下田家で位牌と版木を預かっていたと思われます。

卯ノ助の力石は、全部で38個（この中に、台東区浅草6-42-8 合力稻荷神社<sup>ごうりき</sup> 馬車通り方面にある力石も含む。）確認されています。

卯ノ助が興業で立ち寄った兵庫県姫路市網干（あぼし）の魚吹（うすき）八幡神社には、日本一の力持ちを記念して卯ノ助の石像が建っています。

※高崎<sup>つとむ</sup>力氏の資料をもとに作成しました。